

民俗博物館だより

Vol. X No. 2

1983. 9. 20



▲大峯山寺奉納扁額 (天川村大峯山頂)

目次

山の神の信仰と修験道 (特別テーマ特集)	1
大和の山の信仰 (特別テーマ特集)	3
胴ミノー奈良県立民俗博物館収蔵品紹介ー (物質文化⑩) ...	5
盆と百万遍念仏・珠数繰り (大和の民俗行事③)	6
大和の山の神信仰とその産物 (フィールドノート)	8
西椎木の野神さん (民俗資料調査抄報②)	11
お知らせ	11

山の神の信仰と修験道

平井良朋

我が国民元初の神信仰は、古来、自然崇拜と祖先崇拜とに大別されるが、蒙昧な自然物採取経済の時代には、その生活を取りまく環境から、自然崇拜の思想が先ず芽生えた事は容易に想像出来る。しかし自然崇拜と言えはまま人間の生活との関係から、特別な利益や価値から、その意義を見出す様に思われ勝ちであるが、今これらを我が国最古の事情を伝える記紀万葉の古典の中に求めてみても、太古の日本にはそれらの面からの例はさして多くは見出し得ない様である。

即ち山岳への崇拜は、木竹薪芝、草茅茸菌を生じて、人間生活を助けると言う実利的な点よりも、巨大なるもの、峨々として奇怪なるもの、雲煙のとぎす神秘的なるものへの憧れや、地震・噴火や奇偶を畏怖すると言うものであり、岩石についても同様に、それが巨大奇形なるものに対する崇拜と言うものとなる。更に植物にあたってはその対象は、松・柏・杉・桧・楠・槻・棕と言った個々の樹木の種類や性質によるのではなく、亭々として聳える姿や、鬱然と巨大な枝葉を伸ばして繁茂する様子に、神秘感を抱く所にあり、動物の場合も蛇や狼が多く現われ、生活上有用と思われる猪・鹿・熊・馬の類をさしおいて、鰐など特殊なものが見出される。こうした事は日本人の神霊観が、ただ食用やその他直接の有用と言う事にのみ繋がっていなかった事を明示するものであろう。

○

然し紀元前3世紀頃に稲作文化がもたらされ、所謂弥生時代に入ると、自然崇拜は大いに変容をとげる。即ち人々は旧来の自然物採取経済の生活を脱し、稲作農業を継続するために一地域への定住を強いられ、一致協力共同作業の必要から集落社会が形成されるとその生活上での希望は、日照りが豊かで水に恵まれ、風は時に順なる結果、多くの生産を将来しうる事となり、これらへの希求は集落を統率する村長を中心として、生活の祈りをこめた祭祀・行事となって行った。

当初の農耕社会は血縁共同体で、その生活は緊密な連帯の上に成立し、集落を拓き、一族を指導統率した人物は族長とし、やがては神として昇化する。即ち祖先崇拜の発生であ

る。この一集落が時を経て政略や婚姻によって他を併わせ、これが次々と拡大されて広域に亘った時、この拡大された地域を統率した者はキミとして登臨する。しかして元の血縁集団の勢力が旺盛なれば、新しい被統合集落はその統制下に入り、擬制的血縁とし共同の祭祀に参加するが、正しくは地縁集団と称すべきで、共同の神は後に産土神としての性格を強くする事となる。

何れにしても古来の日本の神霊信仰では、死して葬られた肉体は地下なる黄泉国に送られるが、ある時間を経過すると、霊は肉体を離れて天空高く昇り、広く遠く飛行し、またそれ自体の必要や、人々の招きに際しては一定地へ去来するものと考えられていて、この事例は記紀神話にも随所に散見する所である。天にある神霊は人間の祭祀を受ける為に天降る時、どの様になるかについて古代人は、具体的にきわ高い山や、神霊の憑るにふさわしい秀麗な山の頂に一度天降り、そこから人里近くへ出現すると考えていた事も、高千穂峯伝説等、古典に度々示される通りである。

かくて山頂には神を迎えるに適当な土地を定め、神の憑るべき所を神聖な樹木とし、霊石としたものが、神籬・磐境とされる。しかし人間生活の便宜上、高山峻峯よりも、より集落に近く神を招いて祭祀を盛大にしようとした時、登攀の便や斉場の広さなど、環境の適した地を中腹に求め、遂には山麓の集落近くの神聖な叢林に招く事ともなり、これが本来存した山上の奥宮（元ノ宮）から中ノ宮、下ノ宮、（里の宮）へ降ると言う傳承や地名の由来となって各地に残される所以である。更に又、人間の恣意によって神が常駐して加護を給わるとの思想から、常設の祭祀施設一斉庭・拝殿を造る事となった。

こうして神は山に降り、また神は山に居ますとの考慮は、山そのものを神体と見、神の居ます山が秀麗平隠でありたいとする時は、大和の大神神社や近江の御上神社の形で具現せられ、峻峻にして神秘的なるを求める考慮は加賀の白山神社、越中の立山神社、信濃の御嶽神社の例となって残されている。また更に小さな地域を限って、神来ます場所として厳しくこれを保全する場合は禁足地とし、拝

殿の内奥に設けられるが、これは大神神社・石上神社や、信濃の諏訪神社上社など、これ又全国に多くの例が見出される所である。

○

以上の様に神降る場所としての山岳への信仰は、日本民族個有の神霊祭祀観であるが、六世紀中葉に至って仏教が齎られる。仏教は我が国への受入の当初から深く官とむすびつき、奈良朝までの寺院は、その分布が明らかに文化の中心地帯である。大和は言う迄もなく、地方でも北九州・吉備地方・関東両毛地方に多く、それが集落地域に存する所から見ても、生活社会の中にあつたと言わねばならない。しかし「僧尼令」にもある様に、僧尼は本則として寺院を離れて、別に道場を立てる事は禁ぜられており、禁令のある如くに山間の自然静寂の環境を求めて、禪道修行する者が当時から存した事も事実であろう。それらは在来の仏教とは趣きも系譜も違ったもので、正統な官府的仏教から見れば異端とも言うべきで、『続日本紀』天平元年四月三日の勅の中にも、当時の山岳仏教とも言うべきものの存在を示唆している。またこれと同様に異端視されたものとしての民間仏教も同じく、これは僧行基への養老元年四月廿三日の禁令の例がある。何れにしても民間的・山林隠棲的な宗教が、潜行しつつも漸次行なわれるに至ったのは、奈良朝末から平安初中期にかけてが著しく、これの最も早く現われた土地は、都近くの吉野山や葛城山周辺、さては熊野の奥であつたのである。

○

吉野地方が比較的早く拓かれた土地である事は、神武東遷の拔埽地であつた古伝はともかく、応神天皇の吉野国橿部との交渉、雄略天皇の巡獵、斉明・持統天皇の吉野宮造営や行幸、古人大兄皇子の出家、大海人皇子の逃避等々、これを証拠づけるものが少なくない。一方、吉野はこの様に公に知られたとは言え、山間僻地である故に、世間より逃避隠住するにも適した土地柄で、これは源義経の逃避、南朝の半世紀に亘る滞留、後南朝の存続等の歴史的事実によっても論証づけられる所である。しかもその地には吉野川の水流と、これを囲む峻峻な山岳、雲霞遥々の神秘的な美景による宗教的雰囲気があり、奥を求めると更に深く神仙の世界を現出して、遠く熊野に連なっていく。

かくてこの地は山間仏教をはぐくむ絶好の地であり、修行を山に求める修道者によって

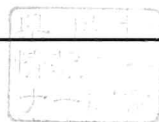
次第に知られ、在地の集落の神信仰と合一して、仏教と神祇との習合、更に中国風の道教的仙術の思想が加わって、仏教の一派の様な形をとるに至った。この発展過程の中で早くから伝説化された人物が役小角で、『続日本紀』文武天皇三年五月廿四日の条には、小角が妖惑を用うるの故に讒せられて、遠流に処せられた次第を記しているが、『日本霊異記』などの記事によると、小角が果して正式な仏教と関係があつたかさえも不明で、むしろ大陸の道教的仙術の思想が包蔵されているか、異端邪説視されていた山岳仏教の方面が強く顕現されていると解せられていた如くである。更にその教化に当ってはその所の古い神霊との融合利用が企てられたと解せられている（辻善之助『日本仏教史』・清原貞雄『神道史』）。

山岳は常に一般人の生活環境とは異なった次元の世界、不可思議なる感性の世界で、死者の世界と考えられた時代（これが平安時代以降の熊野信仰と繋がる）がかなり長かった。従って山岳における信仰・宗教は、苦行の宗教、野性の宗教で、最も罪や穢を恐れる所である。これを払拭し去るためには、水や火で浄化する事が出来ると信じ、寒中の滝に打たれて垢離をとり、心を清め、柴燈護摩を焚いて罪障の消滅を企り、額突きの連続、五体投地を行なって身を苦しめる等、激しく懺悔して初めて御嶽（山上岳並びに大峯奥駈け）に登りうるとしたものである。かくてこの靈力は修行のしるし（験）として現われるから、験力とよばれ、これを得る修行が「修験道」となつたのであつた。

修験道は一人一人の修験者の実践的信仰であり立ち、僧侶の個人的行法や、在家修行者の行が重要な要素であるが、平安中期以後になると他の仏教崇派の影響をうけて教団化し密教、殊に古義真言宗醍醐派三寶院と天台宗寺門派聖護院に属する事となつたが、もとより両寺を中心に起こつたものではなく、後世二大寺がその事業の一部として統轄したに過ぎず、当初から超宗派的なものと考えてよい。

何れにしても太古以来、日本個有の血縁共同体から生じた神信仰が、神霊の憑代としての山岳信仰として成り、山岳仏教・道教的仙術思想と融合し、密教的教理等に裏打ちされ独立の宗教として大成したものである。

昭和58年8月20日成稿（天理図書館近世文書室長）



大和の山の信仰

浦西 勉

今回の特別テーマ展「山の信仰と吉野修験」は、山と人間のかかわりの中で生じてきた、民間伝承にスポットをあてようとして企画をした。その山と人間とのかかわりの内、特に山に対する人間の信仰面（精神面）に注目をし、それにまつわる資料を紹介しようとした。そして、次のような項目を立ててみた。

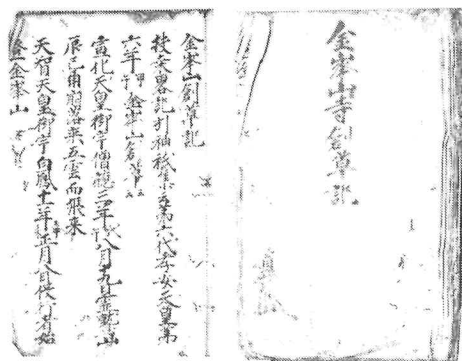
- ① 山の信仰 これは今日民間に残る山に対する宗教行事を中心に紹介する。
 - ㊦山の神 ㊧ダケ山と信仰の対象の山
 - ㊨祖霊のやどる山 ㊩三輪山の信仰、以上の細項目を立ててみた。
- ② 吉野修験 大峰山の修験道は古くかつ盛んであった。この根拠地となつたのが、金峰山（吉野山から山上ヶ岳まで）である。この地域、つまり吉野山と山上ヶ岳の修験にかかわる資料を紹介する。この細項目は次の通りである。
 - ㊦役小角と蔵王権現 ㊧修験道の発達と吉野山 ㊨吉野山の文化(1)一年中行事 ㊩吉野山の文化(2)一吉野曼荼羅・版本 ㊪大峯おく駝の絵図 ㊫山上ヶ岳大峯山寺と奉納額
- ③ 行者講 各村々に山上詣の風習をもつ行者講が存在するが、この行者講の成立や文化について紹介する。

以上の項目を立てて、展示を進めているが、特に、②の吉野修験の部分が中心となろう。したがって、ここでもう少し詳しく、この部

分の展示内容を紹介することにする。

平安時代、仏徒が山林修行をしきりにしたようで『本朝法華験記』（平安後期頃成立）には応照という僧の他7名が山伏を先達として大峰山の霊場で苦行した話が記されている。また『日本霊異記』（平安前期頃成立）などにも禪師広達が「吉野の金の峰に入り、樹下を修行して仏道を求」めたとある。このことから、さかんに、吉野山、大峰の山々にて山岳修行する仏徒が居たことが想像されよう。しかし、実際、吉野山が組織だって活動し始めたのは中世に入ってからであろう。中世になると、『金峯山創草記』や『金峰山秘密伝』などの史料や経理書が残っており、それぞれ吉野山に関するそれまでの伝承を理論化し、活動の大きな基礎としたのであろう。この背景には中世大和の諸寺院が、吉野を最大の行場として、当山36先達を結集させたこともあろう。また、熊野から吉野山まで修行する天台系の本山派の山伏が吉野山を根拠地とする動きも吉野の修験が理論化していった一つの要因でもあろう。また、吉野山における「年中行事」は大変重んじられていたようで、竹林院蔵の「当山年中行事条々」や桜本坊蔵「金峰山寺子守勝手両社々僧年中行事」など中世の年中行事の記録があり、この時代の盛大であった様子が知られるのである。

また、中世における神仏習合思潮によるところの、曼荼羅も作られており、吉野曼荼羅



▲金峯山寺創草記（金峯山寺蔵）



▲大峯々中秘密絵巻（桜本坊蔵）

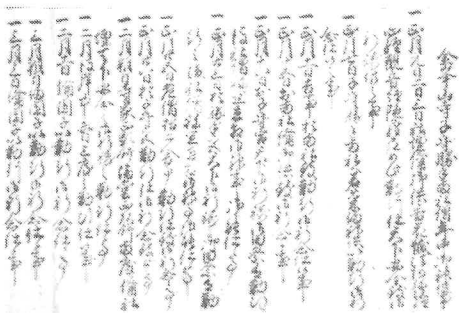
吉野山は中世末に一山焼失している。このため中世の文化はかなり散逸しまた一山の経済も衰退したようである。近世になると、藏王堂などの再建や、各寺々の経済の苦しい中から、中世末にすでにあった、金峰山の信者に対して接近していったのは自然のなりゆきであろう。これが、近世の山上詣の母体となった原因のように思える。先に示した吉野曼荼羅の版本が喜蔵院、桜本坊などに残されており、また金峰山寺にはその版木の掛軸が残っていることから、この吉野曼荼羅が吉野山の信仰の民間への浸透にはたした役割は実に大きかったものと思われる。このように、近世民間の人々の吉野・山上詣が多くなるのである。吉野山を案内する版本が数多く出るのもこのような背景によるものであろう。

近世、民間の信者が吉野山にやってきて、各々自分の宿坊で泊り、山上詣をするのであるが、この宿坊で、数々のお札おたが発行されていたようである。盗賊除・牛馬安全、五穀豊穡などの版木が残っているところから、巾広い信者に対して、修験道の加持祈祷による呪符を発行したのである。このように、近世の吉野山は信者との活発な接触の場所として、民間に様々な文化を提供したのである。

このような信者が何人か集って、村々では行者講、あるいは山上講が結成された。この行者講の人々は金峰山の山上にあたる山上ヶ岳の大峰山寺に参詣するいわゆる山上詣をさかんに行うようになったのである。この山上ヶ岳は天文3年(1534)に一向宗に焼きうちされ、その後再建されたようで、その様子は、「和州金峯山山上山下并小篠等之絵図」(天理図書館蔵)や「大峯々中秘密絵巻」(桜本坊蔵)によって知ることができる。それによると本堂は「山上本堂間数1間1事 表行十二間、裏行十間一尺七寸、但内外陣共右ハ京間也」とあり、本堂再建は元禄四年(1691)七月一日上棟とある。またこの絵図や絵巻に、広6つの宿坊が描かれており、信者が宿ったのであろう。

さて、この大峰山寺の本堂には、この再建に協力した信者の名を刻んだ額が多数残っている。一面に200名も刻まれている額もありその人数は多い。また、再建に寄附をした人々の出身は大阪・堺を中心に大和、京都など各地の地名をみることができ、信者が広域にわたっていることが窺い知れる。

山を神や仏が住む神聖な場所として信仰し、その山の中で心身練行の苦行をするという行為は、山に対して私達が受け継いできた古くからのかわり方であって、私達の精神的な部分に多大の影響を与えていることであろう。



▲吉野曼荼羅部分（如意輪寺）



▲金峯山寺子守勝手社僧年中行事部分(桜本坊蔵)



胴 ミ ノ — 奈良県立民俗博物館収蔵品紹介 —

徳田 陽子

今回は、服飾(A)の服物(A)のうち雨具・防寒具(ホ)の一つであるミノを取りあげる。ミノの種類は、形状から背ミノ・肩ミノ・胴ミノ・丸ミノ・ミノ帽子・腰ミノに分けられるが、当館々蔵品のミノのなかで一番多い胴ミノについて紹介したいと思う。^{註1)}胴ミノの館蔵品は62点である。使用目的は野良仕事用の雨具である場合が多いが、林業の盛んな十津川村や下北山村・上北山村などのように山仕事や筏流しなどの場合に利用したところもある。

県下では、胴ミノは、単にミノというところが多く、又は胴ミノがなまっただと考えられるドミノ、あるいは、素材によってワラミノ・シュロミノ・スゲミノということもある。

胴ミノの素材は、稲ワラ・シュロ・スゲの3種類があり、地域によっては3種類のミノが収集できたところもある。この素材によって胴ミノをさらに分類して館蔵品を紹介していくことにする。館蔵品の中で、号を占めるのがワラミノである。

● 胴ミノ類

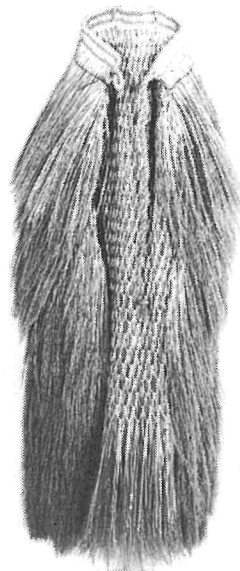
(1) ワラミノ ①(原名)ミノ、分類(A Aホ) 整理(A 2-203)、登録(3-K404)、(収集地)大和郡山市柳町(旧所有者)森本清春氏(形状)長さ 105、幅49、厚み1〔備考〕スエ^{註3)}(稲ワラ^{註2)}の一番上の節から穂先までの部分)の穂先の部分が表になるように向きを揃えて、節よりの部分を2、3本ずつ小編みにしていく方法で丈夫なミノができる。しかし、量的に少ない穂先をたくさん使うため稲作を主な生業とした奈良盆地に多い。館蔵品の収集地はこのほか、天理市杉本町、五条市岡町、生駒市上町、都祁村下深川、安堵村東安堵、三宅町石見、川西町梅戸・結崎・下永、斑鳩町稲葉、上牧町下牧、香芝町下田、明日香村八釣などがある。スエ部分だけでなくワラ全体を使ったミノは、山添村三ヶ谷・毛原、安堵村東安堵・窪田、十津川村東中などから収集されている。

②(原名)ワラミノ、分類(A Aホ) 整理(A 2-502)、登録(12-38)、(収集地)山添村春日(旧所有者)室正良氏(形状)長さ 100、幅49、厚み 1.5〔備考〕ワラを新しく継ぎ足すとき、新しいワラのまん中辺を横からワラナワで編み、新しいワラの半分を折り返すようにする。収集地は、月ヶ瀬村長引・尾山、都祁村下深川・萩、山添村三ヶ谷・室津・毛原・菅生、大宇陀町、榛原町桧牧、曾爾村長野、菟田野町岩端・宇賀志・吉野町山口などがある。

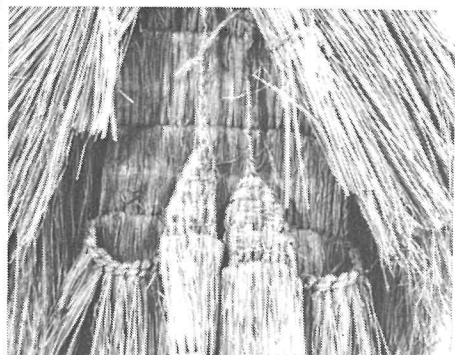
(2) シュロミノ (原名)シュロミノ、分類(A Aホ)、整理(A 2-201)、登録(7-K1027)、(収

集地)五条市野原、(旧所有者)福井栄次氏(形状)長さ 117、幅 113、〔備考〕シュロ皮を折り重ねた上を糸で縫って作る。収集地は、こ

(1) ①
ワラミノ



(1) ①
ワラミノ



のほかに、御所市東佐味・東寺田町、都祁村友田、山添村中峯山、平群町平等寺、菟田野町松井、高取町上土佐、下市町貝原、西吉野村向賀名生などがある。このうち、西吉野村は、かつて盛んにシュロ竹を栽培しシュロ縄の素材を産出したところである。

(3) スゲミノ (原名)スゲミノ、分類(AAホ)整理(A2-T)、登録(38-27) (収集地)黒滝村堂原 (旧所有者)中田基治氏、(形状)長さ105、幅76 [備考]ワラとほぼ同じ作り方であるが、折り返さずに重ねるだけで継ぎ足すところもある。スゲ以外の紐で編む場合もあるが、小編みにしたのが館藏品には多い。収集

地は、菟田野町下芳野・古市場、下北山村下桑原・池峰、上北山村西原・河合、野迫川村北今西、十津川村東中 (以上小編み)、五条市新町 (折り返し)、黒滝村鳥住、西吉野村湯川 (以上重ねる) などがある。

以上、ワラ・シュロ・スゲ製のミノを地域的にみてくると、手に入りやすい素材を使って作られていることがうかがえる。さらに、ミノの地域的な違いを生業などと関連づけながら調査していきたいと思う。

註1『日本民俗資料事典』(第一法規)による。

註2 (原名)は、採集地における名称をいう。

註3 (形状)の計測はすべてcmである。

分類表	分類番号	内容	材料	点数	呼称
雨具・防寒具	A A ホ	胴ミノ	ワラ	38	ミノ・ワラミノ・ドミノ・ドウミノ・ケミノ
			シュロ	12	ミノ・シュロミノ・ドミノ
			スゲ	12	ミノ・スゲミノ
合計				62	

大和の民俗行事 ③②

盆と百万遍念仏珠数繰り

奥野 義雄

大和の地藏盆は、時期的に2つに分かれ、7月23日～24日に行なわれる場合と、8月23日～24日に行なわれる場合とがあり、前者の場合は奈良市内に多くみられる。

この地藏盆が、いつ頃から盆行事の一環として行なわれるようになったかは明確さを欠き、先学諸氏による論考があるが、定説となるべきものは今のところない。春秋彼岸との関連で推察したことがある(『地藏盆―地藏盆行事とその源初形態への検討へー』『民俗博物館だより』第9巻2号〈大和の民俗行事②⑧〉所収)が、地藏盆の源初形態と所謂庶民が受け入れた地藏盆の形態を提示するには至らなかった。

したがって、地藏盆に関して諸論攷があるが、現在のところ地藏盆がどのような宗教的内容を伴った信仰に根差したものかは明らかではない。

しかし、今日まで民間に伝承されてきた地藏盆は、歴然と現代に受け継がれ、その内容も多種多様であるが、ここでは地藏盆にみる百万遍念仏珠数繰り(ジュズグリあるいはズズクリと県下では呼称されている)について紹介していくことにしよう。

※

※

毎年23日～24日に行なわれる地藏盆は、奈良の旧市街地とその周辺にみられるが、奈良市西の京でも盆行事として地藏盆が営まれてきた。この地域では、7月23日に各町内に祀られている地藏尊の石仏を掃除し、祀られているところに提灯を吊り、お供物を供えて、地藏まつりをする。今日では、夕刻になると町内の老人によって御詠歌が読唱されるが、かつては子供も加わってズズクリが地藏尊(石仏)の前で行なわれたということである。

この西の京と同様な経過を辿ってきたと考

えられるのが、奈良市幸町の地藏盆であろう。この幸町でも毎年7月23日～24日に地藏盆が毎年営まれるが、同町内の老女によって御詠歌が読唱される。この御詠歌が唱えられる以前に、「地藏十王経」がお寺の住職（オジュツさん）によって読経されるのであるが、戦前までは、この読経の後に町内の子供たちによってヒャクマンベン（この町内ではジュズクリと呼ばずに、百万遍珠数繰り念仏の「百万遍」をそのまま呼称する）が営まれたが、今日では「百万遍」のかわりに「御詠歌」が唱えられているのである。

また、ここと同じ様相を呈する奈良市破石町の地藏盆も毎年7月23日～24日に営まれるが、御詠歌の読唱もない。しかし、戦後にも「地藏さんの堂内に大きなジュズがあった」という点からも、地藏盆に百万遍珠数繰り念仏が営まれていたことを推察させる。

これらの地域に近接する地藏町では、地藏堂内でジュズクリが毎年7月23日に行なわれている。町内の大人が導師を勤めて伏鉦を叩き、この鉦の音に合わせて子供たちが大きなジュズを繰っていくのである。そして、ジュズを繰りながら、「ナムアマダブツ、ナムアマダブツ」と唱える。

ここでは、奈良市域のみを紹介したが、このように大和では、地藏盆に百万遍珠数繰り念仏が営まれていた地域は少なくなかったであろうが、地藏盆と百万遍珠数繰り念仏が何時頃どうして結びついたのか、という点をはじめ、その結びついた時期などについては、聞き取り伝承（資料）から明らかにしえないのである。

一方、この地藏盆と結びついた百万遍珠数



▲地藏盆（奈良市幸町）

繰り念仏の視点だけでなく、大和の民俗事例ではないが、兵庫県加西市北条町や島根県松江市北田町などにみる8月13日～15日の盆行事の時期（主に15日）に百万遍珠数繰り念仏が営まれる民俗事例も合わせて、〈盆行事〉と〈百万遍珠数繰り念仏〉との関連性を〈民間伝承〉からは窺えなかった。このような状況下では、その伝承から明確にしがたい両者の接点と時期を〈文献〉とによって、民俗行事の一つとしての〈盆行事〉・〈地藏盆〉を再考する必要がある、と考えざるを得ないであろう。

このような課題を内在させながらも、大和において現在も地藏盆と百万遍珠数繰り念仏とが結びついて毎年7月23日～24日に営まれる現実是否定しがたいし、この地藏盆に関与するのが子供達であることも事実である。この子供の関与は、単に地藏菩薩が子供達の守護仏であるという伝承によるものであろうが、単に「子供達の守護仏」という観念的なものだけで、地藏菩薩が崇められてきたとのみ考えるのは一元的かもしれない。

したがって、ここでは、今日まで受け継がれてきた地藏盆と百万遍珠数繰り念仏の民俗事例を紹介し、そこに内在するものが現状においても明確にし得ないことを提示したにすぎない。

（1983. 8. 15丁）



▲地藏盆のジュズクリ（奈良市地藏町）

大和の山の神信仰とその賽物

奥野義雄

大和・奈良県下とりわけ吉野郡および大和高原（宇陀東山）の山の神への信仰は、山家の人々が山に対する崇高の念と畏れとを居抱きながら祀ってきた精神的支えであったといえる。しかし、この精神的な支えも次第に現代社会の変貌に伴って精神構造が変化しつつ〈山の神〉への崇拝も畏れも消え去ろうとしている。

したがって、〈山の神〉への祀りごともしずつ消滅しつつある。この現象と相関性をもって大和にのこる山の神信仰とそれに伴う供物や賽物も次第に簡略化し、あるいは消滅の途にある。

ゆえに、今回の特別テーマ展「山の信仰と吉野修験」の関連の聞き取りの結果から県下の各地域での山の神信仰と供物・賽物についてほとんどその伝承が消えつつあることが窺えた。

ここでは、これらの聞き取りを主に大和の山の神について紹介し、今後の山の神信仰やその供物や賽物の検討に資することにした。

*

*

山の神は、一般には農耕神と考えられ、田植の時期になると〈里〉に降り、田の神となり、里人に崇められ、この時期が過ぎると山に戻って〈山の神〉となると信じられてきた地域も民俗事例としてあり、その研究もある（堀田吉雄著『山の神信仰の研究』）。

大和では、このような伝承よりも、たとえば十津川村域の民俗事例をみると、

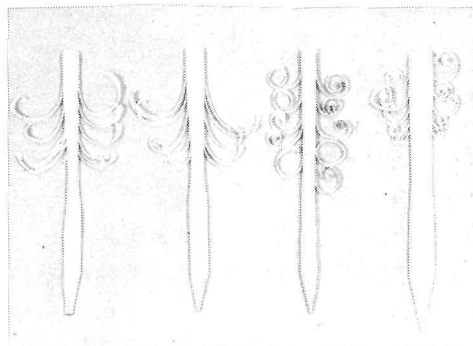
山の神さんは、木の数をかぞえているので、山の神まつりの前に木を切ると祟りがあるという言い伝え＝伝承がある（十津川村大字林）。また、「山の神さんは女の神さんだ」と考えられて久しい地域も少なくないのである（上北山村大字白川、下北山村大字浦向、川上村伯母谷、十津川村大字七色など枚挙に遑がない）。

このような伝承に裏打ちされてか、十津川村域や上北山村や下北山村域では、木製の男根（地域によって呼び方が異なるが、ヘノコ

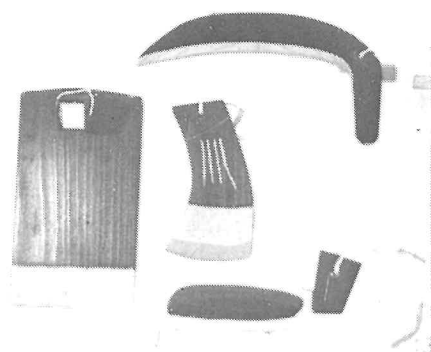
などという）や、男根を形象化したケズリバナ（あるいはケズリカケともいう）が賽物として、山の神まつりの日に供えられたのである。

たとえば、十津川村大字重里では、山の神まつりの当日（旧暦11月7日）、山で仕事をする人たち（個人または数人）でケズリバナを賽物として供えたという。しかし、大字＝ムラとしては山の神まつりの当日、ケズリバナはアズキのダンゴ・サイレ（^ワサンマ）などの供物と共に供えなかったのである。だが、かつて個人または複数の人で供えられていたこの賽物のケズリバナは今日ではほとんど供えられなくなったということである。

また、川上村大字伯母谷では、山の神の祭礼当日には御酒、塩、洗米、魚（サバやタイ）などの供物と共にヘノコを供えたが、この賽物のヘノコを供えた時期は、古く大正時代のことであり、今日ではこの賽物については伝



▲ケズリバナ（下北山村浦向）



▲農道具一部（東吉野村伊豆尾）

承としてのこっているだけである。

この伯母谷と同様な伝承をもつ地域として、十津川村大字七色を挙げることができよう。

この七色の大字＝ムラでは、山の神まつりの当日（新暦11月7日）、大字＝ムラから五升のモチが供えられ、山の仕事をする組合（イカダ組合など）で御酒や川魚（アユ）やモチなどが供物として、ヘノコが賽物として供えられたのであるが、賽物のヘノコは大正末期か、昭和初頭に供えられたのが最後であり、その後、山の神まつりの当日、賽物のヘノコを見ることはなかったということである。また、この七色では供えられたモチを祭礼後撒いて（御供撒き）、盛大に行なわれたということである。

さらに、賽物のヘノコを供えた民俗事例として、上北山村大字白川の山の神まつりを挙げておくことにしよう。この白川の大字＝ムラでは、賽物のヘノコを山の神まつりの当日供えたということであるが、この賽物が供えられた時期は、昭和40年代であった。この地域での賽物はヘノコであったが、ケズリバナではなかったことがわかる。この賽物は、山の神のまつりの当日、供物に副える御幣とともにこのムラの老人がつくって供えたということである。

さらに、上北山村大字河合では、山の神まつりを、山仕事に入るときには、かならず行ってきたという。山の神まつりの当日には、御酒、塩、洗米などの供物と共に、ヘノコなどの賽物を供えたが、この風習も戦後まもなく行なわれなくなったといわれている。この河合の大字＝ムラでは、山の神まつりは山仕事の事業所ごとに供物や賽物を供え、まつりの当日、事業所ごとに山の神の神前に幡を立てて、往時は盛大に行なわれていたのである。

一方、賽物のヘノコなどと共にキンマの模型やイカダの模型（イカダの原木にみたてて、1～3本程をミズヒキにくくって）をつくり、これを山の神の神前に吊っておく、という上北山村大字西原の民俗事例もある。

このように男根を表現するヘノコ、さらにケズリバナ（ケズリカケ）などの賽物以外に、ミニチュア（模型）の用具の賽物を山の神に

供える風習は、現在の民俗事例かつ伝承による限り、吉野郡内としては特有な存在である。しかし、宇陀東山間では、このような山の神まつりの風習は少なくない。

たとえば、奈良市別所町では、鍬や鎌や唐鋤や馬鍬などの農道具が山の神まつりの賽物として供えられたのである。そして、この山の神まつりの当日にはカギが懸けられたのである。このようなカギの賽物が供えられた民俗事例としては、山添村大字片平、御杖村大字神末、都祁村大字小倉、そして山添村大字菅生などの各地域でその伝承がのこっているのである。さらに、農道具や山道具などの模型（ミニチュア）を山の神の当日、賽物として供える民俗事例は、東吉野村大字伊豆尾、同村平野、同村滝野、そして同村杉谷などがあり、さきの奈良市別所町を除けば、聞取りによる限り、東吉野村域に集中していたことが窺えるのである。

このように山の神信仰にみる賽物は、大和の各地域ごとの特色を表わすものと理解できると共に、これらの賽物から、

- ①男根をかたどったヘノコなどを供える地域
- ②男根を形象化したケズリバナ・ケズリカケなどを供える地域
- ③男根あるいは形象化したものの両方を供える地域
- ④農道具あるいは山道具の模型（ミニチュア）を供える地域
- ⑤カギを懸ける地域
- ⑥カギと共に近江（滋賀県）でよくみられる股本人形を供える地域（大和では、山添村菅生のみ）
- ⑦カンジョナワを吊る地域（本文中では紹介しなかったが、山添村大字桐山、同村大字北野などが挙げられる）

という7群に分類することができる。

このように山の神まつりの賽物から、その祭礼を7種類に分けることができると共に、山の神まつりを行なう主体についても、次のごとく、4群に分けることができるのである。すなわち、

- ①大字＝ムラ全体の祭礼として、村人全員が参加して行なう。

③山仕事をする各個人あるいは複数者が参加して行なう。

④ムラの行事であると共に、山仕事に従事する人々が参加して行なう。

⑤山仕事の事業所が主体になって参加して行なう。

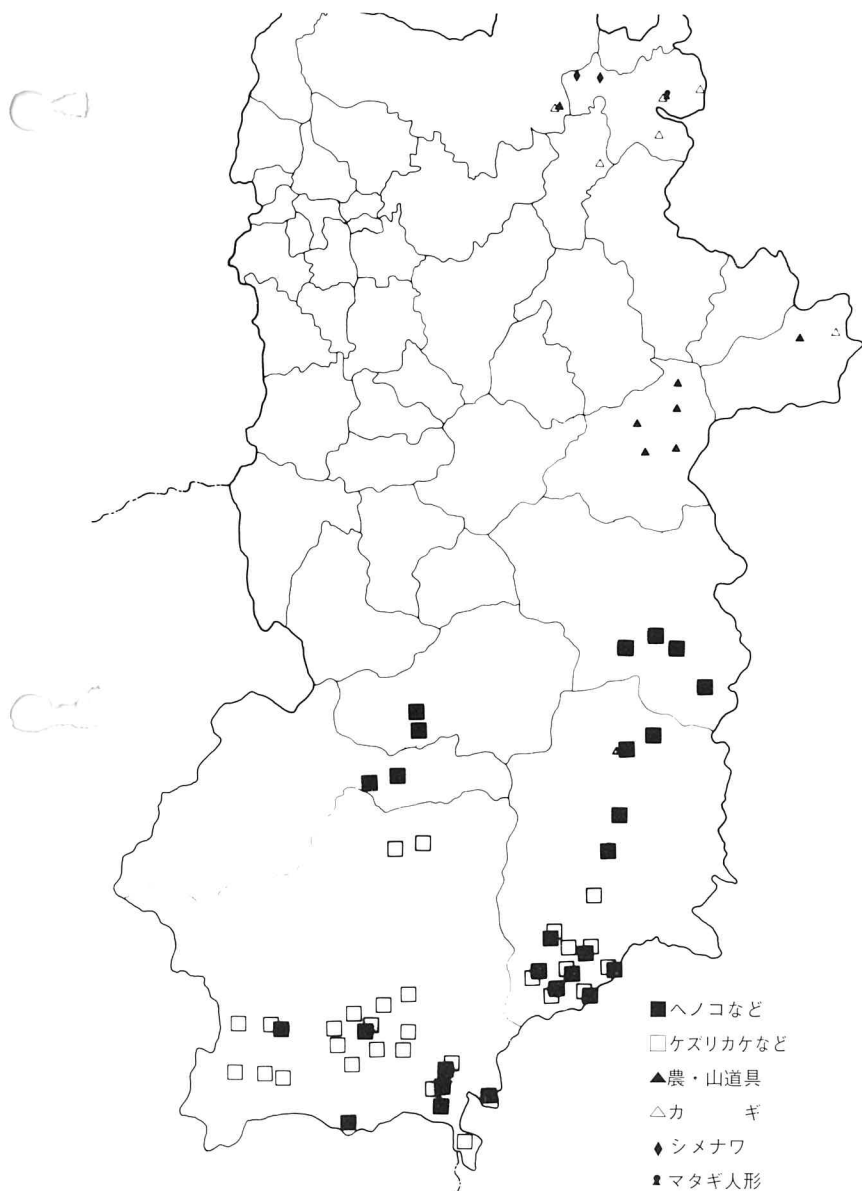
という4つに分けることができる。

この4つの祭祀主体について、各地域の社会的かつ経済的構成をあらためて検討するこ

とから始めるならば、①②③④の祭祀主体が山の神まつりにおいて、どのように位置づけられてきたか、という課題が生起するが、この点は後日に譲りたい。

そして、ここでは、①から⑦に至る分類から地域的特色を把握することが、山の神まつりを理解する一助になる、と考えられるとともに、この賽物の特色を提示し、今後の検討にゆだねたい。

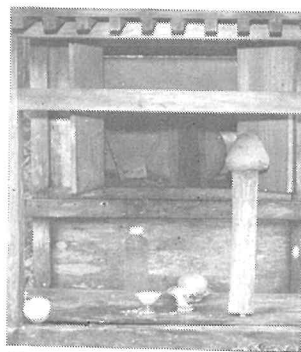
(1983. 8. 14日)



△カギ (山添村)



□ケズリカケ (十津川村)



■ヘノコ (下北山村)

西^し椎^ぎ木の野^の神^{がみ}さん

大宮 守人

今回は大和郡山市西^し椎^ぎ木で行われている「野神さん」の行事を見る機会を得たのでここに概要を報告する。

西椎木は大和郡山市の西南部にあたり、南は安堵村東安堵、西は斑鳩町に接する大和川水系の富雄川東岸に位置する村落である。(全戸で26軒、その内在家25戸・寺1箇所)。

毎年6月4日の午後に野神さんのチマキをつくる。4日はうるち米8割ともち米2割の粉を熱湯で練りあわせ菰の軸をさして真菰の葉に包んでおく。これを5日の早朝に、煮立てた湯釜の中で十分に湯掻く。こうすると真菰の香りがほどよくチマキについておいしいという。

作るチマキの数は家によって異なり、昔は200本ほどつくったが、今は100本ほど(米田家)だという。これは、チマキをかつては盛んに親戚・知人への配りものにしたためらしい。また昔は小学校6年生以下の男児のある家ではその人数分の「ショウブデンボ」というものを作った。これは菖蒲の葉を固く束ね、手でさげる部分は菖蒲の葉を三つ編みにして輪に作ったものであるが、今は昔ほど作られていない。

昔は、6月5日の早朝小学校6年生以下の男児が学校へ出るまでに西椎木の各戸を廻って祝儀を集めた。そして、最年長の男児(6年生)が親となってこれを取りまとめ、野神さんに供える菓子などを買い、供えた後、皆で分けて食べたが、この祝儀を集めに廻る時にめいめい前日にこしらえてもらったショウブデンボを手を持って、祝儀をもらう家の内庭でこれを土間に打ちつけ、次の台詞を三唱した。

ネエサン オキテルケエ〜

ネテルケエ〜

ショウブデンボデ イオ(祝うの意か)タロケエ〜

と唱えて一軒ごとに内庭を打ってまわったものだというが、今は行われていない。

そして、学校から帰って(午後2時〜3時頃)野神さんへ参るときに早朝に使ってボロボロになったショウブデンボを御供のチマキと共に持参し、野神さんの木であるヨノミの木に投げ上げた。できるだけ高く投げて上にひっかかるほど学業が成就するといった。

今日でもショウブデンボを木に投げ上げることは少しだけ見られ、昔の名残をとどめている。昔は野神さんへ村中の人々が参拝したものであったが、今は西椎木地区の6年生の父兄の世話で行っており子供会の行事のごくになっている。6月5日の午後2時頃から地区内の6年生以下の児童(男女を問わず)がめいめいチマキを持って約30名ほど集まる。そして親となる6年生の男児が野神さんの祠の前で祝詞をあげたあと持参したチマキや配られた菓子を食べる。またお供えした神酒(清酒)をヨノミの木葉に数滴そそぎ、なめるようにして参拝者もいただくが木葉があまり小さいので酒を飲むという感じではとうていではない。

かつて、この時期は麦秋の最中であり、さらにその後には田植えをひかえているという多忙な季節であったため、早朝から子供が各戸を廻り村人を起こしてまわるという意味があったのではないかという(米田彦治氏談)が、この麦秋の時期、あるいは田植え前の頃に、昔は10〜11月の秋に各地で行われていた亥子の亥子突き(子供達が石や藁束で家々の庭を突いて廻る)と同じような行事が5月にも菖蒲の東で行われていた面影を今日も残している例として西椎木の農神さんの行事は県内ではめずらしくまた大変興味深いものである。

★★★★ おしらせ ★★★★★

●民俗博物館の行事予定

☆⁵⁸ 9月23日〜11月11日

特別テーマ展「山の信仰と吉野修験」

☆上記の特別テーマ展開催に伴う展示替えを9月13日〜9月22日の間に行ないます。その間テーマ展々示室を閉室いたします。

☆9月25日(日) 体験学習講座〈ワラフゴづくり〉

☆11月27日(日) 体験学習講座〈シメナワづくり〉

☆⁵⁹ 1月21日(土)〜22日(日) 体験学習講座

〈特集・はたおり教室〉

※体験学習講座に参加ご希望の方は、講座内容、時間、受付日等々についての詳細を当館へお問い合わせ下さい。

☆昭和58年10月16日(日)〜11月20日(日)の期間に民俗カルチャー講座〈民俗コースⅡ〉を開講します。

●民俗コースⅡ〈神々を祀る民俗と芸能〉

⁵⁸ 山¹⁶の神まつり

水¹⁶神に祈る踊り〜雨乞習俗として〜

野¹⁶神まつり

田¹⁶の神への誘い〜御田植神事から〜

※上記の講座は募集制になっていますので、ご希望の方(全回出席可能な方)は当館へ往復ハガキ(コース名、住所、氏名、年令、電話を記入)でお申し込み下さい。

☆予告：民俗カルチャー講座・民家コース(街道・寺内町そして町屋)は、⁵⁹年2月19日(日)〜3月18日(日)の開講です。

《表紙解説》大峯山寺に奉納された扁額的一面である。県内外の行者講の人たちが寄進した扁額は三百余面にもものぼる。この扁額は、貞享四年銘のもので、大和郡山町中が「金子」とともに寄進したものである。

■編集後記■

昨夏の涼しい夏に比べて、今夏は猛暑続きであった。8月の盆の頃には、台風の接近で暑さがやわらいだ感じであったが、紀伊半島附近にある台風の動向に関心が注がれ、一瞬、過ぎ去った猛暑を感じなくなった8月半ば。

園内の樹木も猛暑で、グツタリ。しかし、時折の夕立ちが蘇生を促した。甦える樹木が緑の光沢をみせて園内にはえる日々。夕立ちの後の生き生きとした樹木。博物館もいまは猛暑の中で力をたくわえる人のように蹲り、あたかも精気の増幅を待つかのように……。

猛暑の夏が過ぎ、朝夕涼しさを漂わせた秋のけはいが10年月への蘇生を促して、公園と博物館に新しい息吹が送り込まれることを願う、盛秋。(女)